連載69 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した 私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

認知症患者さんが車椅子から叫ぶ憂い・悲しみと、暴言・暴力からのメッセージ（魂の行動）

高齢者施設で生活するK.Sさん（83歳・女性）を、久しぶりに定期診察することになりました。

K.Sさんは、アルツハイマー型認知症で、車椅子で移動をしています。食直後であっても「おなかがすいたよ～ 何か食べ物をおくれ～ 誰かいないの～」と叫びます。また「体がしんどいよ～ 痛いよ～」と終日職員を呼びますが、他の入居者さんには「そこどけ～ じゃまや～」と命令口調になります。

聴診器を彼女の胸に当てようと私の体を近づけたところ、後方から悲鳴に近い大声がしました。「だめよ～！だめ！だめ！（のようなこと）」。当院の同行スタッフの声でした。とっさに身を引こうとしたのですが、K.Sさんに白衣の袖をかまれて、離してはくれませんでした。それは、いわゆる幻覚・被害妄想・暴言・暴力行為の病状で、教科書上、接近困難事例とされるものです。K.Sさんは、院長である私に対して、いつも心を開いてくれていました。しかし、アルツハイマー病は進行すると、高次脳機能障害で意識と行動が断裂し、時には失行・失認（おはしを見て、使い方がわからなかったり、見ても何かがわからない状態）がみられます。

今後はさらに、介護と看護、周囲のスタッフが密に連携し、療養継続がスムーズに行なえるよう努力し、精神科の専門医と内科のかかりつけ医との共同主治医制をとり、治療効果を期待することにしました。

いずれにしても、各種病状に合わせて、専門医同士の連携で自立支援を行うことは国策（厚生労働省）でもあるのです。

最近、高齢者の徘徊（はいかい）による行方不明がクローズアップされていますが、さらに、失行・失認の問題も大きな社会問題となっています。

いずれにしても、地域で支え合う絆を強めることでしか真の解決とはならないでしょう。現在進行している市町村主体の地域包括ケアに期待するばかりです。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/